HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本アニメーションの表現性に関する研究 ： 東アジアにおける受容を交えて［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	靳, 麗芳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11950号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59929
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Lifang_Jin_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　靳　麗芳

学位論文題名
日本アニメーションの表現性に関する研究―東アジアにおける受容を交えて―

本論文は、主に 1980 年代以降の日本アニメーションを研究対象に、現代日本のアニメーション作家・作品における独自な表現性を、その海外受容実態の一例をめぐる検討を交えながら総合的に考察したものである。

本論文は、二部構成をとっている。第一部の作家・作品論は、第一章から第五章までの五章からなっている。この部分は、作品分析を中心に据え、現在日本では芸術的にも認められており、アニメファンにも支持されている前述の監督たちの代表的な作品を対象に、作品のテーマや、映像・音声による表現技法などに注目して分析した。その中で、第一章と第二章で扱ったのは、押井守監督の作品である。押井守は、独特なスタイルでアニメーション映画を製作しており、アニメーションに関しては独自の思想と方法論を持っている。つねに映画の表現方法を意識して創作を行なうアニメーション作家として、押井守がどのような作家性の強い作品を作ってきたか、その作品群にはどのような表現性がみられるのか、それについての考察は、まず第一章で行なわれた。

第二章では、押井守の『GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊』（1995）およびその続編『イノセンス』（2004）を詳細に考察した。第一節では『攻殻機動隊』をメインに、作品における「機械」の表象、ならびに表象機械としてのアニメーションという表現様式について論じた。第二節では、さらに『イノセンス』を考察対象に加え、押井守作品における「アジア」の表象について分析を行なった。『攻殻機動隊』などの作品で押井守は「テクノ・オリエンタリズム」を内面化していると指摘されているが、筆者はその映像をつぶさに考察することによって、従来の指摘とは異なる見方を示した。

続く第三章は、今敏の作品についての考察に当てている。今敏は一貫して「夢」というモチーフを扱い、現実と虚構の「皮膜」を表現してきた。ここでは、特に『パプリカ』を取り上げ、彼の作品に頻出する虚実混交の物語世界がいかに構築され、表現されているのかについて記述した上で、今敏の作品における演出の特徴を検討した。

第四章では、「異郷」という切り口から細田守の作品、『サマーウォーズ』（2009）と『おおかみこどもの雨と雪』（2012）の二作を分析した。この二つの作品におけるある人物たちは、場所としての故郷にとどまりつつも、既成の制度や規範、観念といったものから解放された「異郷」に行くことになる。その点について、具体的な映像に即して詳細に分析し、この二作が観客に示している自由な生の可能性を指摘した。また、同章は『時をかける少女』、『おおかみこどもの雨と雪』、『サマーウォーズ』といった同作家におけるアナログとデジタルとの対比表現、「映画的」手法についても触れている。

第五章では、庵野秀明の『新世紀エヴァンゲリオン』（1995 年のテレビアニメ版と 2007 年の劇場版）と羽原信義による『蒼穹のファフナー』（2004）を中心に、日本のアニメーションにおける音声の機能について論じ、音楽および声優の声がいかに作品の内容と関わっており、アニメーションの不可欠な一要素として機能しているのかを考察した。

第二部は、第六章から第八章までの三章からなっており、日本アニメーションの受容にかかわる考察である。まず、第六章では、日本のアニメが隣国の中国で受容される過程、いわば受容の歴史を時系列に沿って考察した。日本のアニメーション作品が中国に伝わったのは、文化大革命が完全に収束し、「改革開放」政策に転じ、新たな時代に向けて歩みだした 1980 年から 1981 年のことであり、その記念碑を作ったのは手塚治虫の『鉄腕アトム』である。本章では、1980 年代、90 年代に中国で放送された日本アニメを統計的にみたうえで、90 年代の中国に輸入された一つの重要な作品『聖闘士星矢』を取り上げ、日本アニメが中国に進出した際、メディアの変遷とともに生じた受容

形態の変容を明らかにした。

第七章では、2000 年代後半中国における日本アニメの受容状況に焦点を当てた。その代表格は、中国に現れた「御宅族(オタク)」である。「御宅族」は「萌」「宅男」「腐女」「干物女」などの言葉と共に新語として現われ、中国のオタク文化のキーワードとして若者の間で流行し定着した。また、1980 年以降に生まれた世代、いわゆる「80 後」も、中国の社会状況や流行文化を論ずる時のキーワードとして頻繁に取り上げられるようになった。本章では、そういった状況を踏まえ、ポストモダンの中国社会における「御宅族」と「80 後」といった社会的事象に注目し、それらの事象が日本アニメとどのように関係しているかを分析し、日本アニメの中国での受容状況を把握することを試みた。分析の手段としてはまず、「御宅族」が深く関わっているインターネットの世界に注目し、そこに現われた言説や現象を集めた上で、中国における「御宅族」の生態を考察した。次に、「80 後」世代と日本アニメの関係をめぐって、アニメなど日本のサブカルチャーが中国の若い世代へ与える影響を論じた。

第八章では、日本アニメの受容の一つの重要な現象として、声優について考察した。この部分では、まず日本における声優の歴史をたどり、声優ブームを概観した上で、日本アニメの声優が国境を越え、さらに言語の境界まで越え、東アジアないし欧米各国の若者の間で起こした「声優ブーム」の実態をみた。また、中国の声優オタク「恋声族」の、日本アニメとの関連性を指摘し、さらに台湾版の吹き替えアニメと台湾の声優が、日本アニメが中国で受容される過程で果たした役割も探った。